真宗大谷派大阪教区教化委員会機関誌［沙羅林］

しゃらりん 17 2008/6

手というのは握れば拳、
開けば掌

掌とは
手の心という意味です

人とぶつかりあうときでも
拳を突き出すのではなく
開いて掌を差し伸べる

相手が拳を開くのを信じて

目次

contents

教区教化委員会の歩み　3

インタビュー　森達也さんに聞く　6

新教区教化委員のご紹介／子どもたちとやってみよう　10

アトリエしゃらりん　11

ちょっといこか／しゃらりんちゃん　12

掌

文　吉内利彦
書　畠中幸代

形声。手と音符尚（あてる意→当）とから成り、物の上に当てる手の部分、手のひら、ひいて、物事にあたる意を表す。

『角川大字源』より

教区教化委員会の歩み

２００８年5月31日で任期満了をむかえた教区教化委員会では、この3年間の任期中、様々な活動を行ってきました。その内容を振り返り、教区教化委員会各部会の部長・幹事・主査の所見を掲載します。

企画部会

企画部会では、２００５年度教区基本テーマの設定について、教区基本テーマを御遠忌テーマと同一の「今、いのちがあなたを生きている」としました。しかし、「御遠忌テーマを踏まえた教区独自のテーマを掲げるべきだ」などの意見が寄せられ、テーマの設定のあり方を含めた議論が必要となり、企画部会委員と専門部会委員による「教区テーマに関する作業部会」を設置し、２００５年度中に協議を重ねました。

その結果、３年間の任期中は教区基本テーマを御遠忌テーマと同一にすることとし、２００６年度、２００７年度は教区としてのテーマの受け止めを年度スローガンに掲げることとなりました（２００６年度「ともに生きよう　かけがえのない　いのちに目覚めて」／２００７年度「ともに生きよう　かけがえのない　いのちを」）。

テーマにつきましては、教区内に御遠忌テーマを周知徹底する一助となり、またテーマを受けてのスローガンにつきましては、「いのち」を踏みにじるような世相にあって、「いのち」の本質に目を向けるはたらきとなったように思います。

今後、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け後期を迎えるに当たり、教区御遠忌委員会の設置も予定されている中で、お待ち受け前期の取り組みを踏まえ、教区教化委員会として重点的に取り組む事項を確認・整理していただき、宗祖の御遠忌をお迎えする姿勢を確立していただきたく思います。

（企画部長　寺林　惇）

儀式・法要部

儀式・法要部では、3年間通して行ってきた事業の一つとして、同朋唱和講習会があります。この講習会では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けて、僧侶、ご門徒が共に法要に参加し、お勤めできることを願いとして取り組んでまいりました。今期は約半数の組に実施いただき、各組それぞれ充実した講習会になったことと思われます。

また、今年度は、教区基本施策の一つでもあります「帰敬式実践運動の充実」ということに鑑みまして、「帰敬式執行に関する講習会」を実施しました。講習会では、参加者にお装束を着けてもらい、剃刀を持って実際の動きをしていただき、その都度、講師がアドバイスをするという丁寧な実習方法を試みました。参加者からは「他の儀式作法の講習会においてもこのような講習方法を取り入れてほしい」という声もいただきました。

同朋唱和講習会

大谷派僧侶として、儀式執行のためにも声明・作法の研鑽の重要性を深く受け止め、今後も講習会の実施に取り組んでいきたく思います。

（儀式・法要部幹事　山内雅教）

研修・講座部

聖典講座では、真宗学として『教行信証』を、仏教学として「七祖聖教」に学ぶことをはじめさせていただきました。いずれも、御遠忌に向けて、宗祖の思想に真向かいになって学んでいきたいとの思いからの企画でした。来聴者も回を重ねるごとに増え、充実した内容になったように思います。宗教学は、社会問題と宗教（仏教、真宗）という視点から靖国問題、憲法問題等をとりあげ、宗門外でご活躍の講師もお招きし貴重な視座をいただきました。

人権に関する実行委員会は、公開講座だけでなく、フィールドワーク、資料作成など各々特色ある活動を展開し、教区にも発信していけたように思います。また、組人権推進要員からは、組における人権学習への関心の低さが報告されており、真宗と人

権というテーマを引き続き深めていく必要性を感じます。

推進員養成講座も定着の感がありますが、推進員の高齢化の問題など、課題も残しています。

特筆すべきは、新たに「青少年問題に学ぶ実行委員会」が誕生したことでしょう。これを機に、教区教化活動が、さらに活性化することに、大いに期待いたします。

（研修・講座部幹事　宮部　渡）

行事部

行事部では「教区同朋大会」「ハンセン病交流会」「戦争展」「真宗本廟参拝推進」の各事業に取り組んできました。

教区同朋大会の開催については、前回の大会が会場を従来の御堂会館から国際会議場に移し、２２００名を超える参加者を得たことを踏まえて、企画部会と行事部の合同会議を開催しました。そこで、前回の反省と参加者のアンケート結果等を検討し、今後の教区同朋大会のあり方を協議した結果、教区教化委員会の任期中に一回開催することが決定されました。開催に当たっては大阪教区27ヶ組からの代表をメンバーとする実行委員会を立ち上げ、種々協議を重ねて大会を一から構築し、結果として第37回教区同朋大会は２００７年５月19日に国際会議場において２４１４名の参加者を得て開催することができました。

ハンセン病交流会は従来からの邑久光明園での年３回の交流会をメインとして、ハンセン病パネル展と邑久光明園作品展、映画上映とお話の集いなどを実施し、戦争展では実行委員による教区内の戦跡取材などを通してテーマを決め、毎年３月に約１ヶ月の写真パネル展示を行ってきました。真宗本廟参拝推進についても、お待ち受け参拝や帰敬式参拝などを企画し実施しました。また、最終年度には企画部会提案の「推進員研修大会」を研修・講座部と合同で開催しました。

（行事部幹事　中島　裕）

視聴覚伝道部

昨年度から始まった「いのちの歩み」シリーズは、釈尊以来の仏教の出発点としての問いである〈生老病死〉という人生の足下の事実を、ドラマ展開する企画に基づいています。

DVD「いのちの歩み２」

その中で前年は「生（誕生）」というテーマを背景として、〈親の誕生・いのちの出遇い〉という日常の具体的風景を作品の中に想像するし易さが比較的にありました。一方今年は、「老」のテーマを孫としての青年の眼差しの上に、〈祖父の老いへの気付き・自分の夢の実現への決意〉を周囲の人々とのつながりを通して表現していくというドラマを作りました。

結果として、青年の視座において「自他の老・無常」の自覚を、仏教・真宗の用語を用いずに日ごろの言葉で展開していく困難さを痛感しました。逆に言うと我われ僧侶自身が、日常の言葉の中に、仏教の説き続けてきたダイナミクスを受け止めていく微細な感性を恢復していくことが求められているのではないかと思います。

今回の作品は、ドラマ展開の上で多くを問いかけ過ぎたかもしれませんが、そのこと自体が青年たる主人公の〈迷い惑う人生の時の表現〉と成り得た……と考えたいです。

（視聴覚伝道部幹事　由上義孝）

ホームページ部

大阪教区ホームページ『銀杏通信』は、まもなく開設10年になります。全国の教区

「銀杏通信」www.icho.gr.jp/

の中でも最も早い時期に始めたサイトのひとつとして、常に先端を走ってきたと自負しています。

この3年間も引き続き、『銀杏通信』の内容の充実につとめてきました。既存の内容を更新しつつ、新しい試みにもチャレンジしています。

研修・講座部の事業案内や行事部の同朋大会への協力、またボランティア推進会議は独自で「教区ニュース」へ記事を掲載していただくなど、他部門との連携も少しずつではありますが、できてきたように思います。

しかしまだまだ身動きが取りにくいというのが、3年間幹事をさせていただいた感想です。他部門との連携をもっと密にするためにも、教化委員会を横断して広報的な役割を担う部門が必要だと感じています。

（ホームページ部幹事　澤田　見）

出版会議

出版会議では3年前の第1回出版会議で、これから3年間で出版したい書物あるいはリーフレットの内容について、委員各自から意見を出し合いました。その結果、

（1）門徒さんが手軽に利用できる、豆真宗聖典を発刊する。その前に、内容に就いてのアンケート調査をまず行う。

（2）青少幼年向けの小冊子を発刊する。

（3）教区教化テーマリーフレットとは別に通夜・法事等で配布出来るリーフレットを発刊する。

以上の3項目を達成するため、項目ごとの編集委員会を各委員でそれぞれ構成しました。

リーフレット編集委員会からは、「彼岸に想う」を既刊。青少幼年編集委員会では、「うまれてよかったね―パパ・ママへのメッセージ」を刊行し、教化テキスト編集委員会では、「真宗ハンドブック」を次期に申し送り、引きつづき編集する予定です。

（出版会議主査　藤澤隆章）

教区テーマリーフレット『生まれてよかったね』

ボランティア推進会議

日頃なにげなく捨てていたものに心を向けてそれを生かす。そんなさりげない行為が他者のお役に立ち、地球にもやさしいリサイクルに繋がるプルタブ集めを始めて6年。空き缶の飲み口のほんの小さなプルタブが「車いすに」変身する。今までに2台の車いすを寄贈しました。（本誌9号に掲載）今年の一月は、今まで最高の量が集まりました。4500キロ余。アルミ缶に換算すると約135万個余、一缶100円平均で金額に換算すると1億3500万円余の消費量の物語が寄せ集まったものです。

人間の都合だけで大量消費、大量廃棄で地球という大きないのちを壊してきた私たちが「使い捨て」に眼差しを向けることこそ真宗のこころではないかと思います。

野外生活を余儀なくされている方に正月にお備えしたお餅や冬物の衣服を送り届けることによって、釜ヶ崎の人々との繋がりも維持しています。

お互い助け合いながら、自分の道を求め、共に阿弥陀様に出遇う活動として真宗のボランティアの道がつけられないのかと、問いと学びを繰り返しつつ、震災についての対策や認知症高齢者の対応に関する講座にも今期は取り組みました。

（ボランティア推進会議主査　松本曜一）

古着ボランティア

森達也さんに聞く

聞き手＝宮部渡・戸次公正
構　成＝しゃらりん編集部

森達也

1956年、広島県生まれ。映画監督、作家。
1998年、オウムの現役信者に取材した自主制作ドキュメンタリー映画『Ａ』を発表。
著書に『「Ａ」－マスコミが報道しなかったオウムの素顔』、『死刑』などがある。

映画『Ａ』を撮って

宮部　大阪教区教化委員会「研修・講座部」で、森さんにお越しいただきたいということになりましたのは、親鸞の思想をご自分の活動と重ね合わせたご発言をたびたびしておられているということがあったからです。また『歎異抄』をこういうふうに読んでおられるのか」と私たちにもう一度読み直さなければならない思いにさせていただけるご発言も多いと感じています。

ですからまず、話のきっかけとしまして、ご自分の生活や主な活動などについて、また森さんと『歎異抄』の出会いについて、お話しいただけたらと思います。

森　十数年前までフリーのテレビ・ディレクターだったぼくにとっての転機は、やはり『Ａ』を撮ったことです。「よくあんな映画を作りましたね」、「よくオウムが撮影を了解しましたね」と質問されることがあります。右翼が登場する「Ａ２」を見た人からは、「どうやって右翼を説得したのですか？」と質問されます。部落開放同盟を取材した「放送禁止歌」など他のテレビ作品の場合は、「よく解放同盟を撮れましたね」とか、とにかく同じような質問が多い。

いつも答えは一緒なんですけど、「撮っていいですか？」って聞いたら、「撮っていいですよ」って言うから撮ったっていう、それだけなんです。

別に強い使命感や目的意識や理念があったわけでもありません。１９９５年から９６年にかけての時期、テレビは朝から晩までオウムばかりとい

シリーズ・聞く

う時代でした。だからフリーランスの立場としてはオウムの企画をテレビ局に持っていかないことには仕事にならない。じゃあドキュメンタリーを撮ろうと考えました。撮るからには当然ながら被写体が必要になりますけれど、麻原や事件に関与した幹部信者たちは、その時点で拘置所に入ってますから撮れない。じゃあ残ってる信者を撮ろうと。ですから、自分としては当たり前のことをやったんですけれど、誰もやってなかったんですね。

よく「すごいものを作ったね」って言われるけどそうではないんです。周りが止まっていたから、たまたま歩いていたぼくが前に来ていたという感じでね。だから、なぜみんなが止まったのかなっていうことはずっとその後考えてるわけです。

宮部　もともとはテレビ局に企画を買われて、お撮りになられたということですか。

森　そうです。しかし撮り始めて2日経ってから、坂本弁護士さん一家の殺害事件にTBSが関与していたということが発覚して大騒ぎになった。オウムに対して全メディアが萎縮したんです。へたに触れちゃ危ないという感覚が一瞬にしてメディア全般に拡がった。その過程の中でぼくがやろうとしていることはどうも危ないということになりました。

それで撮影中止を命じられて、当時は共同テレビジョンという番組制作会社と契約していたので、月～金は普通の仕事をして、土日にデジタルカメラを持ってオウムの施設に通って撮っていたらその動きが上層部に知れたんですね。それで、契約解除、クビになりました。

ですから最初から映画にしようと思ったわけではないんですよ。しかしどのテレビ局に持っていっても、もうとんでもないっていう感じで。

宮部　それでもやめようということにはならなかった？

森　もうすでに数ヶ月撮ってたんです。上九一色村に自腹で行ったりしてましたから。

そこで初めて自分でカメラを回したことで、はっと気づいたことがあった。いざ自分で撮ってみると「なんだ映像って結局は自分が全部選んでるじゃないか」と。それまではテレビにいて、客観・公正・中立・不偏不党が当たり前なんだっていう環境にいたんですけど、そうじゃなく「思い」でできているものなんだっていうことに気づいた。じゃあ「思い」を思いっきり出しちゃえばいいんだと。たぶんそれまではずっと自分の「思い」を封殺していたんですよね。でも実際は封殺できてないんですよ。映像っていうのは全部これ主観ですから。主観で撮りながら、主観ではないと思いこもうとしていたんですよね。それはとても辛かったんですよ。その辛さがなくなったんでおもしろくなった。

そうこうしているうちに、フリーランスのプロデューサーが現れて、彼らは自主映画を専門にやっていましたので、じゃあ映画でやろうかということでできあがったんですね。

それで98年に公開しました。今思うとほとんど客来なかったですね。試写会になるとメディアがいっぱい来て、みんな興奮して帰るんですけれど、全然記事にならない。観た人は「ぜひインタビューしたい」って言ってくれるんです。しかしそれっきり連絡来なくなってしまう。どうしたんだろうと思って連絡をすると「実は上司が……」とか「デスクが……」とか。

宮部　つぶされてしまうんですね。

森　デスクとかプロデューサーとか編成部長とか、とにかく観ていない人につぶされてしまう。オウムのPR映画だ、そんな不謹慎な映画の記事をうちの新聞に載せるのはとんでもないとか。

ただ海外では映画祭も含めていろいろ評価されました。ですから日本よりも海外で観た人の数のほうが圧倒的に多い時期がしばらく続きました。

歎異抄との出会い

森　その後『A』を本にするっていう話がありまして、編集者からその本の解説を芹沢俊介さんにお願いしようと言われて、書いていただいた内容が、悪人正機についてだったんですね。ぼくは『歎異抄』を読んだこともなかったし、悪人正機の意味も、たぶん悪人のほうが助かるという意味かな

とか、そんなレベルでしたから。だから解説を読んで、「ああ、親鸞ってこういうことを言っていたのか」とちょっとびっくりしました。その後芹沢さんにお会いして話を聞いたり、また自分で本も読んだりしました。ちょうどその時期に築地本願寺にぼくを呼びたいっていうお坊さんがいらっしゃって、内側から湧いて出るものと外側から来るものが一致するような形で、親鸞に対する興味がとても強くなりました。それが数年前です。

宮部　もともと親鸞の思想がベースにあって、お撮りになっているということはなかったわけですね。偶然芹沢さんの解説で結びついてきた。

森　はい。ぼくの映画を観ればわかることだけど、オウムの信者のほとんどは凶暴でもないし凶悪でもない。普通なんですよ。もしかしたら普通以上に純真で、善良かも知れません。でもマスメディアではこの視点は絶対に出せない。マスメディアでオウムを語る時は2つのレトリックしか許されていないんです。ひとつは凶暴凶悪な殺人集団。もうひとつは麻原に洗脳されて自分の感情を失ったロボットのような不気味な集団。それ以外で語ってしまうってことは、彼らとぼくたちは、もしかしたら同じ存在かもしれないってことになる。テレビの前の視聴者にとってみれば、善と悪の境界が融解しちゃうんですよね。自分たちと何が違うんだと。

たぶんそれがぼくの映画が、マスメディアだけじゃなく日本社会全般から排除された理由なんだろうなと思うんですよね。そんな時に、芹沢さんの話に刺激を受けて『歎異抄』を読み始めたりすると、ああちゃんとこんなことを言ってる人がいるんだなって。

宮部　例えばテレビのワイドショーを観ても、結局メディアによって、ヒールかヒーローか、どちらかに仕立て上げられて、しかもヒーローだったものが一夜にヒールになっていく。

そんなマスコミの二極化を、語られたり書かれたりされていると思うんですけども、そのことと親鸞の悪人正機、あるいは「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」という善悪の感覚を、同じものとして、今までみてきたことはなかったように思います。

森　いきなり二項対立から始まっちゃうことが最近とても多いですね。ある前提から出発する。じゃあその理由ってそもそも何？っていうのが抜けちゃうんですよね。

例えば、「うさぎの角は尖ってるか丸いか」って言われたら、「うさぎに角はないよ」って答えるべきなんです。ところが今は角が丸いか尖ってるかから始まって、角があるかないかっていう論考が抜けてしまう。そうするととんでもない結論になっちゃうわけで、今これがとても多いです。

その帰結として社会全体の危機管理意識が悪化して不安が高まります。余裕がないから、二項対立的なもの、つまり善と悪だったり、黒と白だったり、前と後っていう、わかりやすい方にみんな行くんですよ。その間をどんどん捨象してしまう。興味を持たなくなってしまう。しかもメディアがそれに拍車をかけますよね。

本来の解釈は違うのかもしれないけれど、「真」「仮」「偽」なんです。ぼくの解釈では「真」と「偽」の概念の間に「仮」というこの世界があるんだと。これはすごい。もうまいりましたっていう感じです。

宮部　グレーゾーンが世の中には存在しますよね。

森　本当はそれしかないんだと思います。

宮部　それと、「仮」っていうのはうさんくさいですね。世の中ってわりとうさんくさいことで話が通っていったり、伝わったりということもあるんですよね。うさんくさいことはだめだみたいなことも今の風潮としてどうなのかなと。

森　そもそも人ってうさんくさいんですよ。先ほどのオウムの話に戻すと、テレビの前で彼らは自分たちとは違うとみんな思いたいんでしょうけれど、ぼくの中にもいっぱい悪の部分はあるしね。人間ってそういう存在ですよね。善と悪が混じってるのが人間なんだけれど、それが純度百パーセントの善になっちゃう。そうすると怖いんですよね。

「A」や「A2」に登場するのは、現役信者です。事件に関与した幹部信者たちとは違って当たり前

だと言う人がいます。でもそうじゃない。

ぼくは今、彼らとの面会をずっと続けています。早川紀代秀さん、新見智光さん、林泰男さん、広瀬健一さん、あと死刑判決確定した岡崎一明さん。みんな地下鉄サリン事件か、坂本弁護士さん一家殺害事件に関与している人ばっかりですけれど、凶暴な人はひとりもいないですね。もちろん短気な人もいれば、ちょっとそれは考えが浅いなっていう人もいますけれど、少なくとも凶暴凶悪って人はいません。

オウムが事件を起こした理由

戸次　麻原もしくはオウムの説いている教義とか思想そのものについては、森さんはどういうふうに読んでおられたんですか。わたしは仏教の教義の上からして、麻原の教えは、密教の延長線上であるけれども、とんでもない逸脱があって、それを思想的に批判することはできます。

ただやはりわたしたちにとってオウム事件というのは、サリンを撒いたこと、そしてまたアメリカの9・11、あれでわたしたちの日常感覚がものすごく揺れて、どこかでなにかへんなことを言えなくなってしまったような感じがあるんです。

森　寄せ集めであることは確かでしょうね。色んな所から色んなものをうまく集めて換骨奪胎しながらくっつけてきてるっていうのはある。ぼくもそのへんは判断できないんですけれど、宗教的な深さよりも、なぜ彼らがサリンを撒いたかって話になれば、ふたつの要因があると思うんです。

ひとつはやっぱり宗教です。宗教の持つ怖さ、負の部分ですよね。死と生を転換する部分が宗教は絶対にあるわけで、それがある意味での宗教の本質的な部分につながると思うんです。これがないことには人間生きていけないです。でもこれがもしネガティブな方向に行ってしまった時には「死んだほうがいい」に短絡しかねない、そしてこれは「殺したほうがいい」に転換してしまう場合がある。オウムのタントラ・バジラヤーナだったりポワであったり。それは十字軍もそうであり、現在のアルカイダもそうですね。死と生が転換し倒置してしまう怖さが宗教にはあるんですよね。それが負に働いた時に宗教は殺戮と親和性が高くなる。昔から人を幸せにするはずの宗教がなぜか戦争とか虐殺ととても近いっていうのは、そういうところにあると思うんですね。オウムの場合もそれがあると思います。

それともうひとつは危機管理。林泰男さんに2月に面会した時に聞いたんですけれど、サリン事件が起きる一ヶ月くらい前に、第6サティアンのすぐそばで刺殺された村井さんと二人で作業してたんですって。遠くにヘリが飛んでて、林さんは「ヘリが飛んでるな」と思っていたら、村井さんがいきなり携帯電話で麻原に電話を始めた。なんて言ったかっていうと「尊師、今米軍のヘリが来てサリンを撒こうとしています」って。林さんはそれを横で聞きながら「米軍のヘリかどうか全然識別もできないし、あんなところでサリン撒いたらこの辺一帯大騒ぎになるじゃないか」と思ったんだけれど、自分よりステージが上の村井さんに対しては咎めづらい。麻原は電話の向こうで「そうかそうか」とか言っている。林さんは「思い出してみるとみんなそれをやっていた」と言っていました。側近たちは、今日自衛隊がどうだとか、今日警察が来てとか、あることないことを。一回井上さんに林さんが「なぜお前そんな嘘つくんだ」って言ったんですって。そしたら井上さんは「だって報告するために尊師の側にいけるんだよ」って答えたそうです。麻原はこの段階で森羅万象を見通せる最終解脱者と宣言しています。つまり報告の虚偽を確認できない。村井さんが「米軍のヘリが」って言った時に「ほんとかちゃんと確かめろ」って言えないんですよ。だって最終解脱者であるはずなのだから。こうして全部情報を鵜呑みにするばかりの麻原の中で危機管理意識がどんどん上がっていって、このままではオウムは潰される、ならば殺して転生させてあげましょうになったんだろうなと。

あともちろんいくつかの要素はありますけど、大きくはこの宗教の部分と、危機管理の部分。それがとても不幸な形で融合したのが、あの事件じゃないかなと思います。

【以下次号に続く】

（文責・しゃらりん編集部）

新教区教化委員のご紹介

教区教化委員の任期満了に伴い、今期（２００８年度から２０１０年度）の教区教化委員が決定しましたので、左記のとおりご紹介いたします。

【企画部会】（◎印は部長）
◎寺林　惇（6組來迎寺）
巨津善祐（1組明福寺）
竹内博明（2組行圓寺）
内山宗之（3組西元寺門徒）
矢幡和男（4組浄永寺）
猪甘教淳（5組安泉寺）
澤田　見（12組清澤寺）
酒井　度（14組慇重寺門徒）
小松　崇（15組泉勝寺）
廣瀬　俊（17組法觀寺）
清水善昭（18組佛念寺門徒）
小松幹子（19組光圓寺）
由上義孝（20組施福寺）
中島　裕（21組善宗寺）
山下成良（27組正念寺門徒）

各専門部会

【儀式・法要部】
辻澤孝司（12組浄念寺）
石井円眞（16組公英寺）
北畠顯諒（21組本通寺）
日野廣宣（21組光照寺）

【研修・講座部】
宮部　渡（15組西稱寺）
稲垣洋信（17組德因寺）
四井眞知子（19組長因寺）
長谷ちま（22組満泉寺）
成井暁信（26組西教寺）
松林宏明（27組法善寺）

【行事部】
井関　靖（10組慶德寺）
太田髙顕（10組光善寺）
相馬方行（17組蓮信寺）
藤井満紀（17組眞願寺）
藤居英一（19組正受寺門徒）
三好泰紹（22組蓮正寺）

【視聴覚伝道部】
松浪崇明（20組西法寺）
平野圭晋（27組願随寺）

【ホームページ部】
難波明則（9組浄圓寺）
松井　聰（13組心願寺）

番外編

ヨッチーの子どもたちとやってみよう！
～つっこんでいくんでヨロシク！～

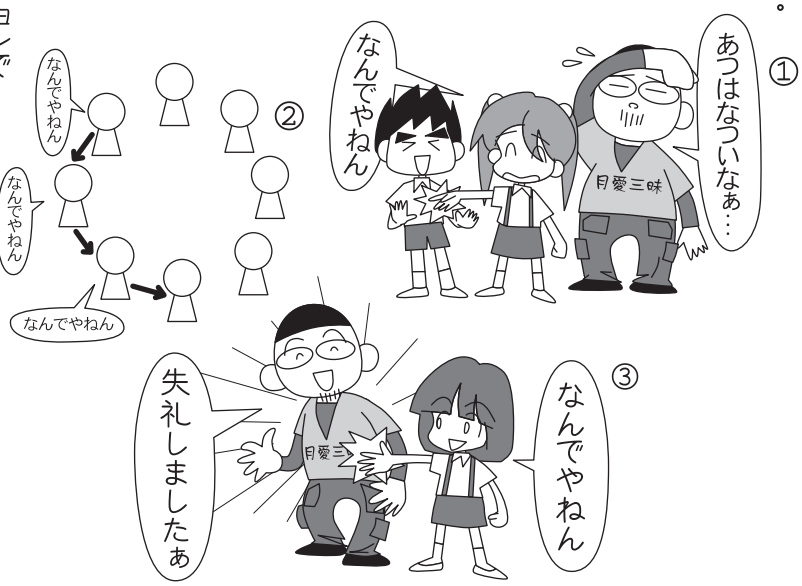
全員で行うゲームです。コミュニケーションをとるためのつかみに最適です。

全員で輪をつくり内側を向きましょう。

①まず、司会者がボケます。司会者の右側の子はそのまた右側の子に「なんでやねん」とつっこみます。

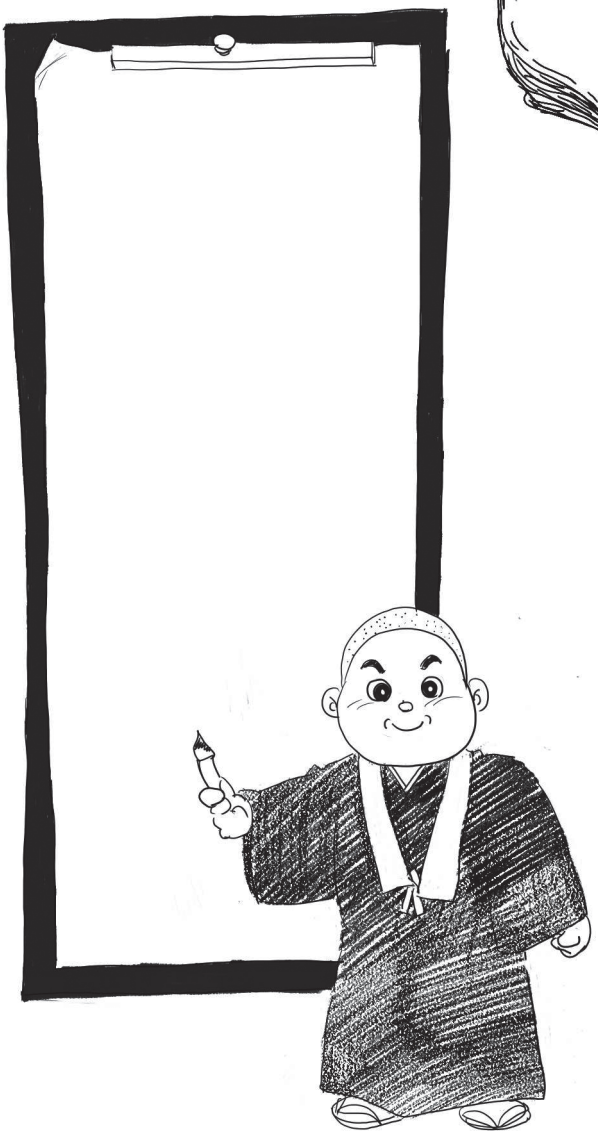
②つっこまれた子は、自分の右側の子に同様につっこみます。

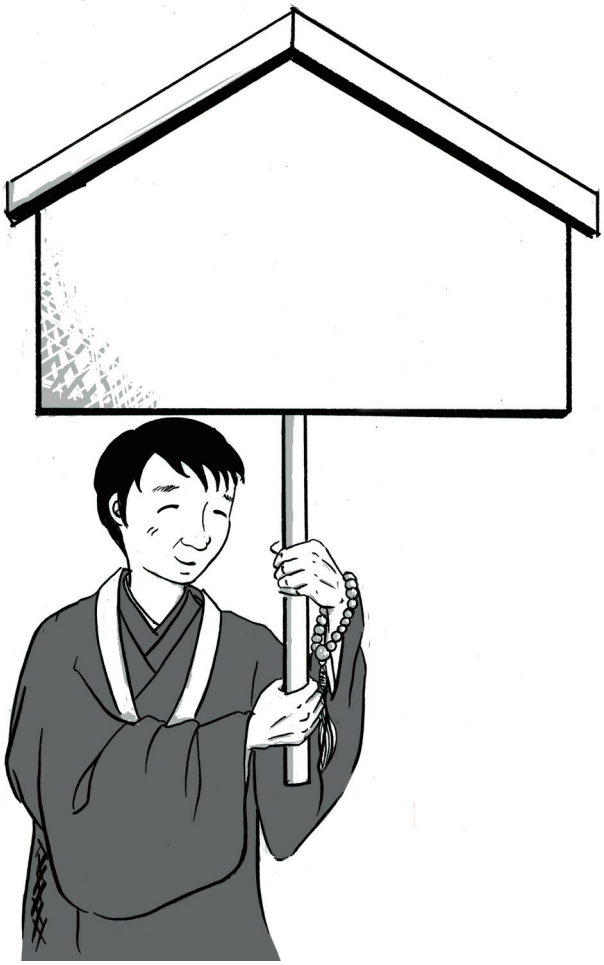
③一周して、司会者につっこみが入ったら、つっこみ完成です。最後はハデなリアクションで決めましょう！



アトリエしゃらりん

画・北川浩三



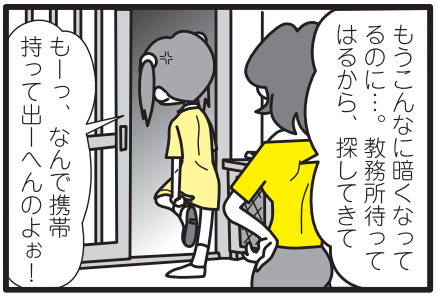


画・畠中晃子

パソコン用データはこちらからダウンロード→ http://www.icho.gr.jp/shararin/sozai/

しゃらりんちゃん

帰ってこない住職　編



ちょっといこか

■南御堂周辺のお店紹介

石焼き　石庵

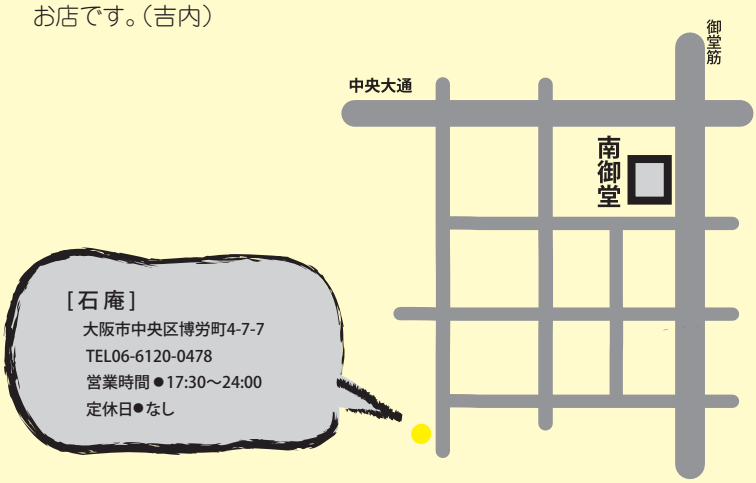
ishian

しゃらりんメンバー石庵に行くのま～き

今回我々が向かったお店は和の雰囲気が漂い、各テーブルの中心に置かれた石がさらに強調させています。メニューは地鶏･魚介･野菜そして釜で炊かれるシャリがあり、全てを味わえる3200円のコースや飲み放題もあり初めてきても充分楽しめるようにしてくれています。

我々のお勧めは「鶏皮」「つくね」「むね肉」で、中でも「鶏皮」は最高です。普通なら油でベトベトとなるのに、石で焼くことにより余計な油は石が吸い込み、外カリカリの中ジューシーでやめられないとまらない美味しさです。他の素材でも石焼によって旨味が凝縮されていきます。そして忘れてならないものは、米とはこんなに美味しかったのかと気付かされる、釜で炊かれたシャリです。料理だけでなくもちろんお酒も美味しく、お店オリジナルの「竹酒」は爽やかで飲みやすいものです。

寒～いギャグを言ってもスタッフは温か～いノリで返してくれ、丁寧に接客してくれます。　石庵は「こんな店があったんか～い」と乾杯したくなるお店です。（吉内）



編集後記

◆お寺の境内の片隅で前坊守が庭いじりをしております。いろいろな花の苗を植えて、水をやったり、土を入れ替えたりと、せっせと世話をしています。◆「きれいな花が咲いた。」と喜んで見せてくれるのですが、私としてはちょっと気になることがあります。◆花は確かにきれいに咲いているのですが、花の鉢の置いてあるあたりがあまり整理されていないので見栄えが悪いと感じるのです。また、鉢やプランターやらいろいろな大きさのものに植えているので全体に統一感がなく、あまり美しいとは感じられないのです。育てている本人は花だけを見ているので「きれい」なのでしょうが、全体を見てみるとせっかくの「きれい」が生きてきません。◆周りとの調和を考えずにある、一点を飾り立てても本当の美しいとはならないと思うのですが、皆さんはどうお考えになるでしょうか？（面と向かって本人に言う勇気はありませんが…）

（K）

発行日：2008年6月30日
発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720
発行人：五辻信行
編集：
第４組　常榮寺・久世見証
第９組　淨圓寺・難波美千子
第10組　是三寺・北川浩三
第12組　清澤寺・澤田　見
第17組　法観寺・廣瀬　俊
第27組　願隨寺・平野圭晋
第27組　信證寺・吉内利彦
第27組　浄宗寺・畠中晃子
http://www.icho.gr.jp/shararin/